

2023年1月11日(水)

老球の細道710号

### スポーツ指導も「話せばわかる」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

2013年1月8日、大阪市立桜宮高校男子バスケットボール部主将が自ら命を絶つてから10年が過ぎた。朝日新聞においては最近社説などで「部活と体罰」「スポーツと暴力」などについての記事が相次いだ。

この事件は部顧問がチームへの不満をぶつけるように主将を殴り、暴言を重ねていた実態が、主将が書き残していた顧問宛の手紙で判明し、当時の社会に大きな衝撃を与えた。そして過去に同じようなことをしていた私も後悔の念で一杯になったことを思い出す。

あれから10年が経過した。昨年、高校時代までスポーツ経験のある大学生639人へのアンケート結果が朝日新聞に掲載された。それによると小中高時代に「体罰を受けた」と答えたのは17%。10年前の同じアンケートの33%から半減。「指導者と選手の信頼関係があれば体罰はあってもいいか」の質問には、容認は14%。62%から激減していた。

現場は改善され、反暴力、暴言への意識は確実に高まっているが、根絶にはいたっていない。2018年には岩手県で高校バレー部男子生徒が顧問からの不適切な指導で自殺。2020年には福岡市の剣道部女子生徒がこれまた顧問からの暴言、暴力によって自殺する事件が起きている。また、福島県においては、県教委、県協会に寄せられる指導者への苦情はバスケットボール関係が最も多いと言われている。

そんな中で昨年から日本スポーツ協会では「子どもを守ろう:BAHD防止キャンペーン」なる啓発活動がスタート。BAHDとは「Bullying(いじめ)」「Abuse(虐待・体罰)」「Harassment(嫌がらせ)」「Discrimination(差別)」のそれぞれの頭文字を取ったものである。かつて「熱血指導」の名の下で正当化されていた高圧的な指導は、選手やその周囲の人たちの判断でBAHDとして訴えられる時代になった。指導者にそのつもりがなくてもである。

指導中に選手の次のような姿を見ると指導者は切れやすくなる。「努力を怠っている」「集中力が欠如している」「責任転嫁をしている」「ルールを破る」「他者を侮辱する」「反抗的な言動や態度を見せている」「指示したことをやらない」「精神的な弱さを見せている」等。この時指導者にアラートが点滅する。一度立ち止まって、燃える情熱をストップしリラックス、そして冷静になって微笑み(「氷の微笑」)対処方法を考えなければならない。

かつて直情径行型コーチだった私は、選手のこのような状況を感じるとすぐに暴力暴言の嵐が吹き荒れ、収まった時にはあちこちへ謝罪の禊が待っていた。原町高校時代の教え子からは当時の未熟な指導を今でも手紙で諫められる。

スポーツ指導は年々難しくなっている。中学校では部活動を外部指導者に委託する時代になる。これからますますコーチなど指導する立場の人たちへの批判の目は厳しくなってくるだろう。だからといって指導者が言いたいことも言えずに委縮してしまっているのは良い指導、自信のある指導はできない。指導者も試行錯誤して自分を鍛えるしかない。